あ と が き

本誌の記事もこのところバラエティーと厚みを増し、核データコミュニティーとその周辺の内部情報として止めておくには惜しいと思われるものが散見されるようになりました。特に、核データの隣接分野の一流の専門家が核データの専門家に理解できるようにていねいに執筆してくださった解説記事の中に、そのようなものが目立ちます。内容的にも、核データや炉物理のみならず、原子力工学全般、さらにはもっと広い分野の方々にとっても十分興味の持てる記事も少なくありません。JENDL−3.2の完成を期に、否が応でも、核データの世界が新しい時代に踏みだしつつあることの反映なのかも知れません。

編集委員の一人として、執筆者の方々の努力がさらに生かされる道はないものかと考えることがあります。記事を土台に、これに手を入れ、学会誌や一般雑誌の記事として掲載いただく。編集委員会が、読者各位のご教示やご協力を得て、適切な学会やセミナーでの招待講演としてお話頂けるよう橋渡しをする。などなど、手だてはいくつか考えられると思います。

さらに、一歩踏み越えて考えるなら、「JNDCニュース」時代の10年を併せれば30年になんなんとする歴史を持つ本誌も、科学技術のボーダーレス化の波に洗われ、今まさに脱皮を求められているのではないでしょうか。「核データニュース」のあり方、ねらい目、発行部数、想定する読者層などを、原点に立ち戻って考え直す時期に差し掛かっており、21世紀まで待っては遅すぎるような気がしはじめています。

（吉田　正）

核データニュース編集委員会

中川　庸雄（委員長、原研）、浅見　哲夫（データ工学）、井頭　政之（東工大）、喜多尾　憲助（データ工学）、柴田　恵一（原研）、高田　弘（原研）、高野　秀機（原研）、吉田　正（東芝）

浅見委員は本号をもって編集委員を退任します。代わりに高田委員が新たに加わりました。

核データニュースへのご意見や記事は nakagawa@cracker.tokai.jaeri.go.jp でも受け付けます。